



喜劇王・渋谷天外④

地域史研究者
三善貞司

喜劇への思い合わず天外・十吾コンビは解散

新路線にのりだす天外

曾我廼家十吾そがのやと渋谷天外が結成した「松竹家庭劇」は、大阪では大人気となりますが、東京公演では成功しませんでした。十吾は「大阪弁がわからんからや」と軽く流しますが、天外は内容が低俗すぎるのではないかと、笑いの質を高めねばならぬと悩み続け、秋田雨雀・藤森成吉・長谷川伸・伊馬春部いまはるへなどの有名な文学者と交流し、彼らの脚本を得て新しい文芸路線による喜劇の公演をめざします。

これにカチンときたのが十吾です。十吾は丹輪加にわか（即興的なこっけい寸劇。色町から始まり、江戸の後半大坂で大流行）の伝統芸を継いだ曾我廼家十郎の愛弟子です。上方の笑いはわしの体のなかに生きているとの自負心も、人一倍強い。年齢も天外より15歳も年長だし、第一公平に見ても役者としての演技力は、十吾のほうがはるかに上手うわてです。

あるとき十吾は、千秋楽の打ちあげ宴席で、いきなり長谷川伸（劇作家。大衆文芸の大御所。代表作「瞼の母まぶた」で有名）をつかまえて、

「あんさん、喜劇とはなにかわかってはりまっか。あんなおもしろいホン書きはって…」
といきなり食ってかかります。天外はうるたえて必死になってひきはなし、ペコペコ頭をさげてあやまり、なんとかその場はおさめます。

これをきっかけに天外は十吾と顔を合わせるたびごとに、喜劇の本質や松竹家庭劇の未来について話しかけ、自分の考えをのべながらお教えいただきたいと懇願します。しかし十吾はとぼけ続けました。

「そない難しい話はおきなはれ。お客はんが笑いはったら、そんでよろしま」

と、相手にしてくれませぬ。そのうちに戦局はきびしくなり、だしものも「軍国の母」「慰問袋」「子は国の宝」など戦意高揚せんいこうやうの芝居ばかり、太平洋戦争が始まると松竹家庭劇は名前だけになりました。

敗戦直後の昭和21年（1946）、天外は妻の浪花千栄子と劇団「スイートホーム」を結成し、地方巡業に出ます。

千栄子は明治40年（1907）生まれで天外より一つ年下、家が貧しかったため早くから女中奉公（当時のことば）にやられ、道頓堀の「浪花」という仕出し屋で下働きをしていましたが、楽屋に弁当を届けたことから天外と知り合い、頼まれて松竹家庭劇に入り、いつしか親しくなります。

いっぽう時代のめまぐるしい変化についていけない十吾は、ポケーツとして暮らしてい

ました。気の毒がった松竹会社は、天外・十吾コンビを復活させ、新しい一座の結成を企画します。おりしも昭和23年（1948）、かつて十吾の師匠曾我迺家十郎と組んで、日本のチャップリンとまでいわれた曾我迺家五郎が病没します。松竹は五郎劇団の座員たちとスイートホームを合体し、天外と十吾を説得して復活させ、「松竹新喜劇」と名づけて本格的な興行にのりだしました。

まだ戦火の爪跡の残っている時代です。失業者や戦災孤児たちが巷にあふれ、物資不足どころか今晚食べるもの、寝るところを求めて誰もが血眼になっておりました。それでも大阪市民たちは死にもの狂いになって復興に努め、同26年には大阪民放第一号の「新日本放送株式会社」が開局、BK（NHK大阪放送局）に挑戦します。天外は時代の流れを先取りして、放送局に新喜劇を売り込みました。もちろん、テレビではない。ラジオです。

「やめなはれ。芝居は目で見るもんや。耳で聞いておもしろいはずはない」と十吾はそっぽを向きます。何度も言ったように十吾は、師匠曾我迺家十郎の仁輪加（江戸時代色町から生まれたこっけいな即興劇。上方で大流行）芸を継承する唯一の役者です。顔の表情や手足の動きだけでひとことも喋らずに大爆笑させる名人です。

けれども喜劇は耳だけでも受けました。関西には次々に民放が生まれ、松竹新喜劇は電波にのってエリアが広がり、人気も急上昇していきます。

この大事な時期に千栄子は天外と離婚、新喜劇から去っていきました。原因は天外の浮気です。OSKから新喜劇に移ってきた九重京子との間に、男の子が生まれたのです。

「四十代の半ばで初めて赤ん坊を抱いた私は、おむつをかえている京子がたまらなくとおしかった。スキヤンダルなどくそくらえという気分になった」

天外はこう語っています。彼は父初代天外の浮気のため生後3ヶ月で、生母からひき離され、おむつどころか生母の顔も名前もおぼえてはおりません。子供の生まれなかつた千栄子は、自分から身を引いたのです。新喜劇の舞台ではいつも夫の浮気にヒステリーをおこし、客席をおおいに沸かしていた彼女は、普段はとてもおとなしい女性でした。赤ん坊をあやしている夫に恨みごとの一つも言わず去っていきます。

千栄子はその後花菱アチャコと組んでNHKラジオに登場、「お父さんはお人好し」などで人気絶頂のタレントになります。

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

（株）ファッションビジネス・御堂筋新聞